



大学の配慮・支援について

聴覚障害者に対する『合理的配慮』は、どんな配慮があるのかご存知でしょうか。まず『合理的配慮』とは、「障害のある人から、社会の中にあるバリアを取り除くために何らかの対応を必要としている」との意思が伝えられたときに、負担が重すぎない範囲で対応することが求められるものです。(内閣府HPより)」ということです。大学の授業における『合理的配慮』をいくつか紹介します。参考にしてください。

授業における合理的配慮	
情報保障の提供	ノートテイク・パソコンテイク・手話通訳の配置、補聴援助のシステムの提供、板書や資料の提供、コミュニケーション上の配慮
教材への配慮	視覚教材への字幕挿入、書き起こし原稿の配布
カリキュラム上の配慮	リスニング科目の代替、聴覚を必要とする実験・実習などでの配慮、グループ討議などを行う授業における配慮
課題・定期試験などにおける配慮	課題や試験範囲などの確実な伝達、注意事項の文書による伝達、リスニング試験の免除・代替・聴取方法の変更

参考文献：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan) より

上記のような配慮があります。また、合理的配慮の提供に必要な環境の整備にも大学へ相談することができます。そのためには、大学に受験相談や入学前相談をして、どのような配慮があるのか確認しなければなりません。大学受験にも、大学によって受験内容や配慮が異なります。診断書がある大学もありますので、入試要項を確認し、受験前に受験する大学に一度問い合わせてみてください。

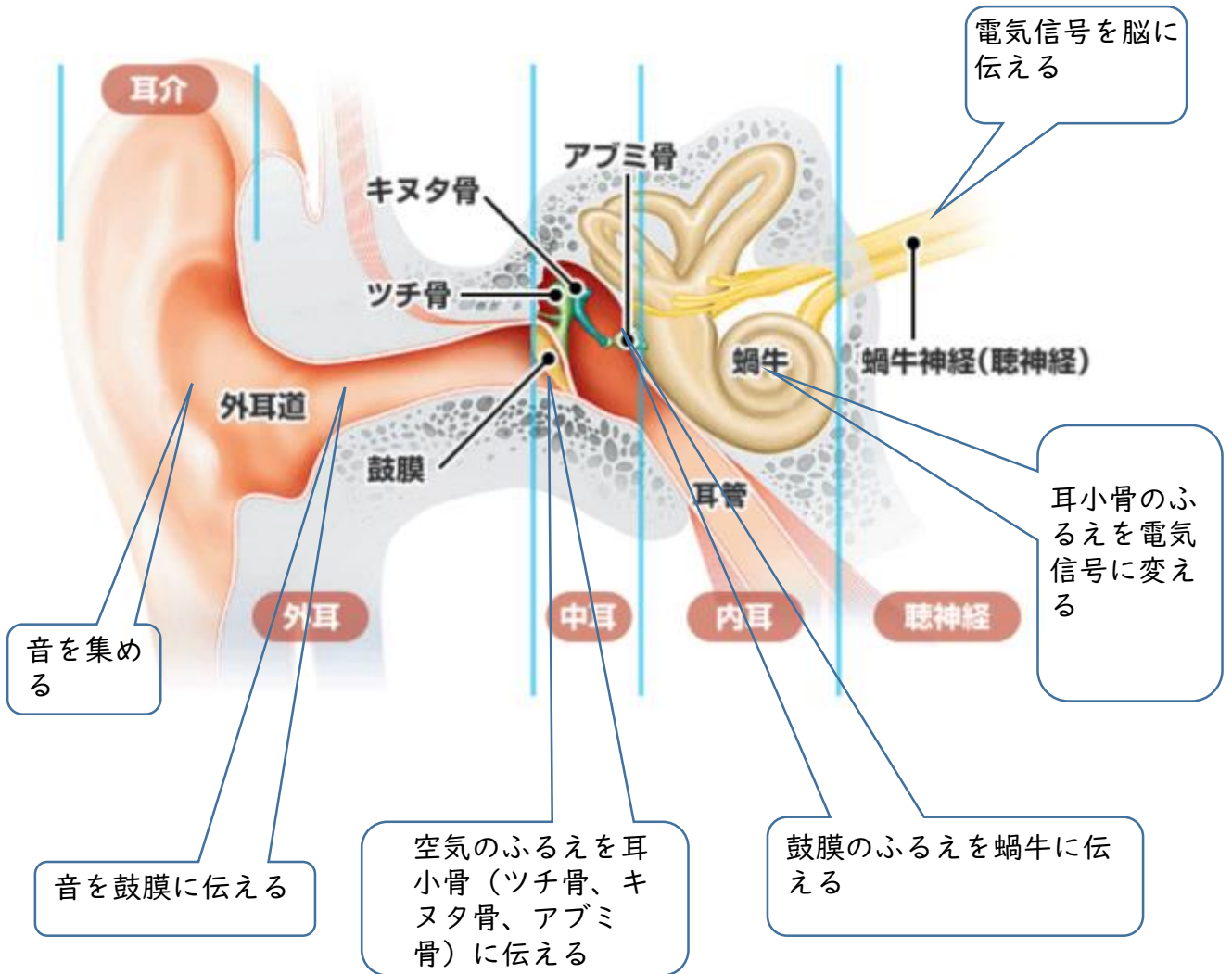
聴覚障害者の中では、聴力の程度・今までの環境・コミュニケーション手段などの状況が一人一人異なります。自分にとってのベストな配慮・環境をしっかりと大学に相談することが大事です。大学と相談をしていくことで、それぞれに合った大学生活を築くことができると思います。みなさんにとって良い学習環境が整備されることを願っています。

〈文責 冨野〉

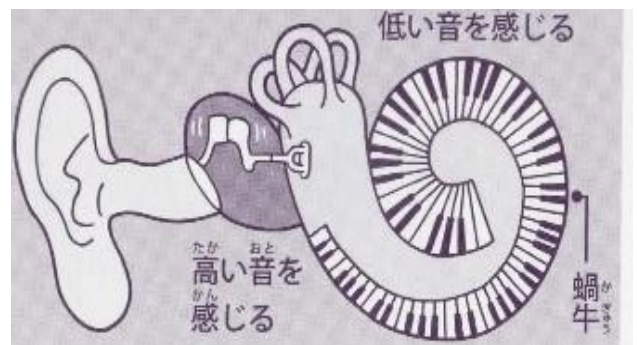
聴覚障害学生支援を詳しく知りたい方は、『日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)』を検索してご覧ください。

《音が聞こえるしくみ》

耳は外から外耳、中耳、内耳の3つの部分に分かれています。外耳はおもに音を集めて鼓膜をふるわせるはたらきをし、中耳は、その空気のふるえを内耳に効率よく伝えていきます。そして、内耳は空気のふるえを電氣的な信号に変えて、脳に伝えるはたらきをしています。



★蝸牛が音を感じるしくみ
蝸牛は、ピアノの鍵盤のように、場所によって感じ取る音の高さが違います。入り口に近いところでは高い音を感じ、奥にいくにつれて、低い音を感じます。



人工内耳の便利な機能について



本校で人工内耳を装着している子どもたちが多くつけている人工内耳の一つにコクレア社の「Nucleus7」という人工内耳があります。この「Nucleus7」という人工内耳は2019年に日本コクレア社が、スマートフォン（iPhone、Android等）で直接電話音声や音楽をストリーミングできる初めての人工内耳サウンドプロセッサとして販売を始めました。今回は、この人工内耳（Nucleus7）をスマートフォンと連携することで使うことの出来る様々な便利な機能について紹介したいと思います。

まず、Nucleus7とスマートフォンを連携するためには、自身のスマートフォンにNucleus Smartアプリをダウンロードしてから、コクレアのアカウントでログインする必要があります。詳しくは、コクレア社のホームページをご覧ください。

機能① アプリの「聴こえの履歴」で装着状況を確認することができる。

この機能を使用すると、送信コイルが外れた回数や話し声を聴いた時間などの重要な情報を着用者の方や保護者の方が直接確認できます。保護者の方にとっては、お子さまが聴いている時間（特に保護者の方と一緒にいないとき）の測定に役立ちます。

機能② アプリでプログラムや音量を瞬時に変更したり、電池の残量を確認したりできる。

外出先で、その時の状況に応じてプログラムや音量を調節することができます。また、電池残量が気になった際にも瞬時に確認できます。



機能③ サウンドプロセッサを紛失した場合に、置き場所を探すことができる。

GPS機能を使用して、サウンドプロセッサが対応するスマートフォンと最後に通信した場所を教えてくれるので、紛失したNucleus 7サウンドプロセッサを探す際に役立ちます。



以上のような機能は、現在Nucleus7に搭載されている機能であるため、Nucleus6などでは、使用することができません。

しかし、今回紹介した人工内耳だけでなく、補聴器などの中には、同様な機能が使えるものもあります。人工内耳も補聴器も日々技術の進化により、様々な機能が搭載されるようになってきました。このような機能を有効に使うことでより充実した聴覚活用ができるかもしれません。皆さんもぜひ一度人工内耳や補聴器の機能についてご確認ください。

〈文責 井上〉

近畿オーディオロジー研究会

夏期講座

8月19・20日に近畿教育オーディオロジー研究協議会が開催する、第22回夏の講演会・講習会がありました。2年ぶりとなった今年度は新型コロナウイルス感染症予防のため、近畿の聴覚特別支援学校を中心に各校を会場として視聴やリモートを使用した質疑応答などを行いました。

1日目

「補聴器の特性とオーディオグラム」「人工内耳」「補聴援助システム」「ろう学校の自立活動の取り組み」「難聴学級の取り組み」「各校の聴力検査室紹介・検査内容紹介」と各校から様々なテーマの講座があり、どの講座も写真や動画を用いることでわかりやすい内容になっていました。

ここでは兵庫県立こばと聴覚特別支援学校での取り組みについて少し触れたいと思います。5歳児を対象に年に7回の自立活動を行い、その中で語音明瞭度検査や発音明瞭度検査を実施することで聞き取り、発音の両面から誤発傾向、得意な音、苦手な音を把握し担任との情報共有はもちろんのこと、保護者とも連携しながら幼児が抱える課題への支援をしているとのことでした。



2日目

〔午前〕 立入 哉先生(愛媛大学教育学部 教授)

「neo難聴への教育支援 - 聾教育40年を振り返って、そして今 -」

〔午後〕 広中 嘉隆先生(奈良県立ろう学校前校長)

「言語指導における手話と日本語」

午前、午後と共にご自身の経験から得たお話をしていただき大変貴重な時間となりました。立入先生のneo難聴者への様々な検査法や対応方法など実践に基づいた話しや、広中先生の言語指導での手話と日本語の互換性の大切さと語用の重要性など、これから聞こえにくい子供達と関わる中で参考になることがたくさんあり、大変充実した研修になりました。

〈文責 山中〉

